

## [館蔵品にみる日本工芸のデザイン展によせて]

光琳・乾山の工芸意匠  
—乱箱・広蓋・硯蓋—

乱箱(みだればこ)、広蓋(ひろぶた)、硯蓋(すずりぶた)。なんと、おくゆかしい響きの言葉なのでしょう。

これらは日常の生活用具の名前ですが、現在では、これらの名前はほとんど使われなくなりました。ただ、「スズリブタ」という言葉は、うれしいことに、日本の古い伝統がよく残されている沖縄で、今も生きています。沖縄では、婚礼や盆の行事などに蒲鉾や卵焼などの口取をのせる盆のことを、「スズリブタ」とよんでいます。

乱箱、広蓋、硯蓋は、言葉としては消えていく運命にあります。そのもの自体は、わたしたちの生活の中で今も健在です。それらは、味気なく「盆」、「箱」、あるいは「入れ物」とよばれています。

大和文華館には、江戸時代中期の画家尾形光琳(1658—1716)と、その弟の陶工乾山(1663—1743)の手になる、たいへんしゃれた意匠の乱箱、広蓋、硯蓋があります。そこで、これらの形や文様の意匠(デザイン)だけでなく、用具の名前の意味(これには「つかうことの意匠」が含まれています)も、合わせて紹介します。

まず、はじめに乾山の『武蔵野墨田川凶乱箱』(挿図1)から。むかしの『倭名類聚抄』という本によ

りますと、「みだればこ」の漢字として「巾箱」をあてています。本来、巾箱(きんそう)とは、てぬぐいなどの小物を入れた絹貼りの小さな箱をいいます。江戸時代の『和漢三才図会』では、「巾箱」(みだればこ)は蓋のない箱(匣)とされています。としますと、「みだればこ」は、「巾箱」(きんそう)の「蓋」がとれて「身」がのこり、その「身」を用具としたものではないか、と想像されます。

もともと「箱(筥、匣、筥)」は、たとえば伊勢神宮で神宝を入れるのに用いられる柳箱のように、上代ではきわめて貴重なものとされておりました。中空の「箱」の中には、魂とか神秘的なものが籠ると信じられていました。あの浦島太郎の玉手箱の「箱」がそうです。神秘的なものといえますと、生命力の象徴である髪の毛もその一つです。髪の毛をくしけずった、その乱れ髪を盛る道具として、巾箱の「身」の方が使われました(挿図2)。たとえば、浮世草子『好色一代女』に、「烏羽黒(うばたま)の髪の落、みだれ箱」とあります。つまり「乱箱」という名前は、乱れ髪の「乱れ」からきているのです。また接頭語の「打」をつけて「打乱箱」(うちみだればこ、うちみだりばこ)ともよばれました。『源氏

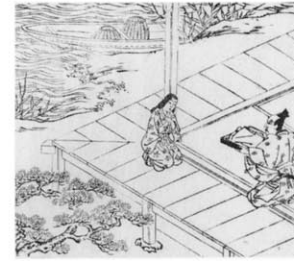


3 流水菊図広蓋 尾形光琳筆

物語」の「絵合」に、「御くしのはこ、うちみだりの箱」とあり、櫛などの整髪・化粧道具入れとして使われていたようです。後世、手回り品や衣類を一時的に入れる蓋のない浅い箱も、「乱箱」とよぶようになりました。また、晝台の発句「みたれ箱菊折入て参りたり」とあるように、菊の切り花を盛るといった粋な使い方もされました。

さて、乾山の乱箱ですが、これは上質の桐材を用いて、じつに精巧優美につくられた小さな箱です(縦27.5cm、横27.4cm、高5.8cm)。その上に、乾山はしゃれた文様を描いています。箱の内側には、濃墨の太い線で蛇籠を描き、装飾的な波頭を配しています。その波頭を縫うように、五羽の金泥の千鳥が軽やかに飛んでゆく。これはおそらく、江戸の墨田川にちなんだものであろう。また、箱の側面と裏には、金泥、緑青、麝脂、胡粉で、細い薄(尾花)を描いていますが、これは武蔵野の秋草を表すものと思われます。いずれも、琳派の作家が好んだ『伊勢物語』を種にした意匠と思われます。

興味深いことに、乾山は裏側に、「華洛紫翠深省八十一歳画」と落款をしたためた後で、表側の絵だけではものたりないと思ったのでしょうか、残りの面に淡彩の秋草図を描き足しているのです。それは落款の上に絵具がのっていることからわかります。そこに、乾山がこの箱に対する細やかな愛情が感じられます。この艶な箱は、若い女性の乱れた朝寝髪を盛るにふさわしいものといえましょう。

4『絵本倭比事』西川祐信画  
硯才女 寛保二年刊

つぎは、光琳の『流水菊図広蓋』(挿図3)です。これは、桐製(縦42.4cm、横36.4cm、高6.0cm)で、内側には裏箔(絹の裏側に金箔を置いたもの)を施した絹地の上に、質のよい群青一色を使って、いわゆる「光琳水」がのびのびとした達者な筆で描かれています。外側は、素桐のまま、底裏には装飾はなく、側面外側には金、銀泥による雲あるいは水(雫)と、胡粉盛りあげによる菊花が描かれています。この流水と菊のモチーフは、光琳が好んだ謡曲の『菊慈童』(『枕慈童』)からとられたもので、長寿の祈りを込めた意匠と考えられます。金泥による落款「法橋光琳、朱文円印「方祝」(まさとき)が、内側左下隅に、しるされています。

幕末の江戸琳派の池田孤郎が編纂した『光琳新撰百図』(1865年刊)に、この広蓋がその展開図二図とともに掲載されており、そこには「みたれ箱」と注記されています。しかし、この光琳の広蓋を納めさめてある外箱には、酒井抱一の弟子で孤村の先輩である鈴木其一(1796—1856)による「菊水之絵広蓋、法橋光琳筆」(蓋表)の箱書があります。「乱箱」と「広蓋」は、いずれも立上りの低い扁平な方形のかたちをしていますので、しばしば混同されました。

「広蓋」は、もともと衣裳を納め置く箱の蓋のことです。衣裳や織り物などを賜うときに、また贈ったりするときに、それを箱の蓋にのせて出しました(挿図4)。のちに蓋のみが単独に作られ、それを「ひろぶた」とよびました(『類聚名

1◎武蔵野墨田川凶乱箱 尾形乾山筆 2『和国百女』菱川師宣画 元禄八年刊



物考』『貞丈雑記』)。

『義経記』(室町初期)には、はじめて源義経と平泉の藤原秀衡が対面する場面で、秀衡は「貝摺たる唐櫃の蓋に、砂金一ふた入れてぞとらせける」とあります。「貝摺」とは、螺鈿のことです。このように、唐櫃の蓋が、贈答のときに用いられました。ですから、箱や櫃の蓋も、たいへん丁寧につくられるようになり、加えて蓋の裏にも螺鈿や蒔絵でもって装飾が施されるようになったのです。

現在、この広蓋は、たとえば、卒業式するとき、卒業証書を入れて置く盆として、また、前の乱箱と同じように、たとえば、日本旅館で、衣類やてぬぐいを入れて置く入れ物として使われています。

さて、最後に「硯蓋」について説明します。「硯蓋」は、まさに硯箱の蓋のことです。平安時代の『栄花物語』には、王朝人の間で硯箱の蓋に歌を書き付けて贈答する儀礼があったと書かれています。また『蜻蛉日記』や『宇津保物語』には、硯箱の蓋に色紙をのせ、また『後拾遺和歌集』には、桜の枝を入れたとあります。王朝の雅な遊びの小道具として、硯箱の蓋が使われました。

後、硯箱の蓋が独立し、「硯蓋」として、饗応のとき酒の肴、あるいは菓子や果物を盛る食器として使われました。重箱が使われるようになるのは、硯蓋より後のようです。硯蓋は、主に蒔絵をほどこした漆器でしたが、乾山は焼き物でこれを造り、光琳が絵付けして、『銕絵菊図角皿』(挿図5)などを合作したことは有名です。この焼き

物の角皿は、当時「硯蓋」とよばれ、お茶会の会席の器として用いられました。粹人たちの遊びの道具でありました。

また、硯蓋は、人へ差し出す書面や書類などをのせる盆としても使用されたことが、『秋長記』など中世の記録に散見されます。これにより、広蓋と同じ使われ方をしていることが知られます。

おわりに、この硯箱の蓋が洒落た遊びに使われた例を紹介していきます。それは光琳も絵画化していますが(挿図6)、『源氏物語』の二十一段「乙女」にあるエピソード。秋好中宮(あきこのむちゅうぐう)が九月のある日に、庭の美しい紅葉や秋の花などを、「御箱のふた」(硯箱の蓋であろう)に入れ、歌をつけて、大柄な童女に持たせて(光琳画では流水図の硯蓋、竜田川の見立て)、隣に住む紫夫人にお贈りになされた。(秋の風情のおすそわけということらしい)。それに対して、春を待ちこがれる紫夫人は、その硯蓋に、苔を敷き、石で岩の感じを出し、そばに常に緑の五葉の松を立てられた。それらは本物ではなく、すべて造りものであった(紫夫人は前もって用意していたらしい)。それに返歌(わたしは春の色が見たい意)をつけて、秋好中宮へ贈り返されました。秋の女と、春の女のすさまじい趣向の応答に、この「硯蓋」が使われているのです。

日本工芸の意匠の面白さは、斬新な形や文様だけではなく、「転用の機知」にもあります。光琳乾山の意工芸匠はその好例です。

(林進)

5 光琳筆銕絵菊図角皿 尾形乾山作



6 秋好中宮の侍女図(部分) 尾形光琳筆

